

時間の社会学・再考

—石内都の写真／記憶実践から—

東京都市大学非常勤講師 塚田修一

1 目的

本報告の目的は、写真家・石内都による活動を<記憶実践>として捉え、またそこから、<記憶の時間>とよぶべきものを考察することで、「時間の社会学」の再検討を行うことである。

2 方法

よく知られているように、Barthesによれば、写真のノエマは「それは—かつて—あった」である（Barthes1980=1985）。それは同時に、「それは—いまは—ない」ことも意味する。こうした指摘が示すように、写真は、直線的に過ぎ去る時間—それは<近代の時間>に他ならない（真木 1981）—において成立したメディアである。しかしながら、写真家・石内都の実践は、そうした写真および時間に関する従来の理解とは性格を異にするものである。本報告では、彼女の活動を大きく三期に分け、主に彼女の実践に関する言説を渉猟しつつ、そこから時間についての社会学的示唆を受け取る。

3 結果

それぞれの期間の活動において、石内は<近代の時間>とは異なる時間を描き出していく。自らが育った横須賀を撮ったデビュー作『絶唱横須賀ストーリー』に始まるⅠ期では、横須賀・EMクラブを撮影した際に彼女が見いだすのは、「空間に保存された過去」である（石内 1993）。

続くⅡ期において、石内はちょうど40歳になった時に、自分と同一歳の女性たちの手と足を撮る（『1・9・4・7』）。「なぜ手と足なのかと言いますと、この40年という時間がいったい身体のどこに溜まっているのかなと思った時に、おそらく身体の末端に貯蔵されているような気がしたのです。手と足が、いわば時間を受ける「器」というような感じが強くしまして、足の裏のタコとか皮膚のシミが時間の「形」に見えたんですね」（石内 2008）。ここで石内が撮っているのは、過ぎ去る時間ではなく、「積み重なる時間」である。

次いで、Ⅲ期の『ひろしま』（2008）においては、被爆者の遺品を色鮮やかに撮影する。「私はこれを社会的な写真としてではなく、今現在、私が生きているのと同じ時間にある物たちという感覚で撮っています。決して過去の歴史や記録を撮っているのではありません。遺品たちが、私の目の前にあるということを、私は撮るんです。私と同じ時間と空間を共有する広島ということです」（石内 2011）。ここでは「過去の現前」が明確に企図されている。

4 結論

すなわち、写真という<近代の時間>に支配されたメディアによって、石内が行ってきたのは、まさに<近代の時間>に抗う、あるいはそれに<記憶の時間>とでも呼ぶべきものを対置する実践なのである。こうした実践から社会学的示唆を受けとり、私たちは古典となった真木（1981）の<近代の時間>モデル等、従来の「時間の社会学」を修正しなくてはならないだろう。

文献

- ・石内都、1993年、『モノクローム』筑摩書房
- ・真木悠介、1981年、『時間の比較社会学』岩波書店
- ・Barthes, R、1980=1985年、『明るい部屋』みすず書房 他